

座

談
会

スポーツの喜び 勝負への心構え

～スポーツ・スピリットの素晴らしさ～



出席者

【ゲスト】 大林素子

広報委員長 岡 浩二

広報委員 幅田昌伸

(敬称略)

今回のゲストは3度のオリンピックはじめ、数々の大舞台でご活躍されたバレーボール選手として、また晴れやかな笑顔と前向きな姿勢がさわやかな印象の大林素子氏。スポーツの厳しさと喜び、勝負への心構えなどをおうかがいさせていただき、古くから「キング・オブ・スポーツ」と称された競馬にも共通する「スポーツ・スピリット」を中心に話していただきました。



勝負の厳しさ

現在、大林さんはキャスターやレポーターなどの仕事をされていますが、競馬場などに訪れたことはありますか

大林 競馬のお仕事をさせていただいたことはないのですが、一度プライベートで行ったことがあります。あまり競馬に関する知識はありませんが、競馬番組に出演している川合俊一さんから、よくお話は聞いています。



岡 大林さんはバレーボール選手として、長年にわたり日本のトッププレーヤーとして活躍されておられました。競馬と同様に勝ち負けをはっきりとさせる世界におられたわけですが、やはり勝利へのこだわりは強いのでしょうか。

大林 こだわりというか、勝つことが当たり前と考えていました。日立というトップチームに所属していましたが、国内で勝つのは当然で、オリンピックで勝つにはどうすればいいのかを考えてプレーしていました。

幅田 私は馬主を10年以上していますが、負けることに慣れてしまい、大林さんのお話は正直、すごいと感じます。ところで、大林さんはイタリアのセリエAでもプレーされていましたが、国内との違いはありましたか。



大林 当時、日本のバレーボールはアマチュアスポーツだったのに対して、セリエAは完全なプロリーグ。実力はもちろん、厳しさという部分においても日本とは比べ物にならないものがありました。でも勝ったときのステータスもすごかったことを覚えています。

幅田 トップ選手でも結果が出ない、調子が悪いな

どスランプに陥ることがあると思います。そのようなときは、どのように対処していましたか。

大林 スランプというものを考えないようにしていました。団体種目でしたので、「負けても自分のせいじゃない」と考えたり。凶々しいですが、勝負の世界にいる人は、とにかくポジティブに考える方が良いと思っています。

岡 大林さんは引退後、モータースポーツのチームを率いているそうですね。バレーボールとは異なるカテゴリーですが、やはり勝負への厳しさを感じることはありますか。



大林 バレーボールとはまた違った厳しさですね。自動車レースはドライバー、エンジン、タイヤなど全てが完璧でなければ勝てませんので、自ら体を動かしていたバレーボール時代と違い、もどかしく思うことがあります。競馬でも騎手が上手い騎乗をしても、馬の能力で負けたり、またその逆もあると思います。どちらも難しい競技ですね。

岡 よく調教師が馬と車は似ていると言いますね。気性の悪い馬が勝てないことを「エンジンはすばらしいがミッションがローとセカンドしかない」と表現したり。馬の心臓や足元の強さ、気性が車のエンジン、タイヤ、ギアに例えやすいのでしょうか。

大林 以前、仕事で美浦トレーニング・センターへ行ったときに、調教師の仕事ぶりなどを拝見させていただきましたが、生き物を扱うとても大変な仕事という印象を持ちました。また、番組などで武豊さんをはじめとする騎手の皆さんとご一緒することもあるのですが、体重を維持しなければならないために、とてもストイックな生活をされていることにいつも驚かされています。

幅田 バレーボール選手もハードな練習をされていると思いますが、体重などはあまり気にされないのでしょうか。

大林 体重管理が必要な騎手の方と違って、私たち

の場合2,3キロ増えても「ちょっと体が重いかな？」程度で済みますので、特に気にしていません。といいますが、バレーボール選手は本当によく食べるんですよ。日々10時間もの練習をこなしますので、食べても体重はあまり変わらないんです。

夢の舞台に立つ

大林さんはオリンピックに3度も出場されていますが、オリンピックという舞台は特別なものなのでしょうか

大林 そうですね。私たちにとってオリンピック以外の大会は、全てオリンピックへの予選のような感じでした。

幅田 やはり子どものころから目指していたのでしょうか。

大林 子どものころの夢はアイドルや歌手になることでした。でも小学6年生の頃には、身長が170センチになっていましたので、「これは無理だな」と。バレーボールを始めたきっかけは「アタックNO.1」です。当時、背が高いことで、いじめられたりしていたのですが、「バレーボールでオリンピックに出場すれば、絶対にいじめられない」と思ったんです。

岡 もしかしたら、テニスやバスケット選手だった可能性も…。

大林 あったと思います。たまたま出会ったものがバレーボールでした。でも、母が走り高跳びの選手だったので、遺伝でジャンプ力や柔軟性が備わっていたのかもしれませんが。そう考えるとバレーボールで良かったな、と思います。

幅田 オリンピックという大舞台で活躍されるまでに、そのような過程があったとは。ご自身も相当な努力があったでしょうが、お母様から受け継いだものも大きかったのでしょうか。競走馬にも血を受け継ぐというドラマがありますので、このエピソードはとても興味深いです。



岡 私も同感です。日本では毎年9000頭もの競走馬が生まれていますが、その一つひとつに物語がありますから。

大林 競走馬はエリートというイメージがありますが、生まれながらにして勝つことを宿命づけられているわけですね。そんな境遇の馬が毎年何千頭も生まれ、競い、一握りの馬だけが栄冠に輝くなんて、壮大な世界ですね。競馬もオリンピックの種目になればいいのに。

幅田 オリンピック種目にはありませんが、海外には凱旋門賞など格式高いレースがあります。馬主にとっては大林さんのオリンピックのような特別な存在です。

岡 日本にも格式あるレースはあり、総賞金の面では世界トップクラスです。しかし、競馬はフランスやアメリカ、ドバイ、香港、オーストラリアなど世界中で行われており、各国のレースに勝つことは誇りになりますし、究極の夢ですね。

大林 競走馬を海外に連れて行くことは大変なことだと思いますが、日本の馬が海外の大きなレースを勝つシーンを見てみたいです。

勝つための験担ぎ

ここにいる皆さんは勝負の世界に関わっておられますが、験を担ぐことはありますか

岡 私は愛馬の粹に合わせてネクタイの色を合わ

せたりするくらいですね。愛馬の馬券は「買うと勝たない、買わないと勝つ」というジンクスがありますね。

幅田 私はあまり験を担がないです。逆に「こうしたら負ける」といったことはありますが。昔は神社にお参りしたりもしましたが、ことごとくダメだったもので。岡さんの言うようなジンクスは不思議とあるもので、私の場合はレースの前に「店員の態度が悪かった」や「転んでスーツを破いた」など嫌なことがあったときに、よく勝ちますね。

大林 勝つためとはいえ、毎回、スーツを破くわけにはいきませんね。ちなみにスポーツ選手には験を担ぐ方が多くいるんですよ。例えばイチロー選手は試合前にチェーン店のピザを食べるという話があります。チェーン店は各地にありますので、同じ味の料理を食べることで、遠征先でも普段と同じリズムを作り出しているんです。私もいつもと変わりなく試合に臨むために、テーピングは必ず右から巻くなど、似たようなことをしていました。ところで、岡さんや幅田さんは、愛馬の名前にも験を担ぐようなことがあるのですか。

幅田 私の場合、特に名前に験を担ぐということはないです。愛馬の名前は家族会議で決めたり、知人に考えてもらっています。

岡 私も名前へのこだわりは持っていません。「母親がドイツで勝ったからドイツの女性の名前にしよう」といった感じで決定しています。

大林 お笑い芸人さんですと、「ダウタウン」や「ウッチャンナンチャン」みたいに「ウ」や「ン」を名前に入ると売れるというジンクスがあるようですよ。

幅田 確かに馬主の中には、愛馬の活躍を願って姓名判断をする方もいますし、ジンクスに沿った名前を付けられる方もおりますね。また、馬主にとって愛馬の活躍する姿は大きな喜びですが、怪我をしないことなどを願って名前を付けられる方もいます。

大林 競走馬は怪我をした場合に安楽死させると聞いたことがありますが、本当ですか。

幅田 そのような場合もあります。悲しいことですが、治療が施せない怪我をしてしまい、その痛み苦しんでいる姿を見ると、致し方ないことなのだと思います。

岡 先日、私の愛馬も安楽死させなければならなかったことがありました。レースを途中で中止し、調教師から「治すことができない」と電話があつて…。とてもいたたまれない気持ちになりました。

幅田 それくらい競走馬は命をかけて真剣に走ることなのでしょう。人間なら「これ以上はダメ」となる状況でも、競走馬は限界を超えて走ろうとしてしまう。能力以上に頑張ってしまうんですね。



大林 競走馬もスポーツ選手も、怪我は防ぎようがないという部分があります。バレーボール選手でも、怪我を体験していない人はいません。怪我の度合いが大きいかわからないかという違いだけです。

岡 怪我に関しては医療技術が発達したと感ずることがあります。かつては競走馬にとって屈腱炎は不治の病でした。しかし、最近ではカネヒキリのように手術することで完治させ、再び活躍する馬も出てきました。

大林 私も現役時代に靭帯を切ってしまったことがあります。当時「靭帯を切る」ということは、医療が進歩した今以上に、選手生命に関わる大事故でしたので、怪我が治っても以前と同じレベルでプレーできるかとても不安でした。スポーツ選手には、ポロポロになるまで現役を続ける人と、ベストパフォーマンスが出せないなら引退する、という人に分かれていますが、私は後者。本気で引退を考えました。

幅田 医療技術の進歩により、多くのスポーツ選手

が輝きを失わずにすむということは、素晴らしいことですね。

チーム力とは

バレーボールやモータースポーツは、個人の力だけでなく、チームワークの力も大切だと思います。大林さんはチーム力について、どのようなお考えをお持ちですか

大林 個々の頑張りや実力あつてのものだと思います。誰か一人でもレベルの低いものがいれば勝てないということは、どんな競技においても同じです。私にとってチームメイトはライバルでした。特に全日本代表のようなチームでは、「私が一番」と考えている6人が同じコートに立つわけですから、自然とチーム内の競争は激しくなります。でも、それは仲が悪いというわけではなく、「勝利する」という共通の目標に向かって切磋琢磨しているということなんです。勝負で勝つためには、それくらいの個性・強さが必要なのだと考えています。

岡 チームワークといえば、競馬にも当てはまる部分があるのではないのでしょうか。騎手は体を張ってくれていますし、調教師は日々、馬の管理やトレーニングをしてくれています。馬を預ける馬主も、彼らとの間に信頼関係が成り立っていないとダメだと思います。

大林 岡さんの言うとおりで、信頼関係は大切ですね。監督、コーチ、ドクターのサポートがあつてこそその選手。ドクターとの間に信頼がなければ、コンディションが監督にうまく伝わりません。選手は競馬で例えるなら騎手や競走馬の役割ですが、周りの環境を整えている方への感謝を忘れないようにしなくては。競走馬もそう考えているかもしれませんね。

岡 競走馬は賢いですからね。レースが近づいていることを感じたり、ゴール板が分かっていたりする馬もいますし、本当にそう思っているのではないでし

ようか。

幅田 バレーボールと競馬はジャンルが異なる競技ですが、大林さんのお話からは周囲への配慮や競技への情熱がとても伝わります。私もポジティブに考えることなど、見習っていかなくてはならない部分が多くあります。

大林 私の周りにも競馬が好きな人が多いですし、女性ファンも増えていると聞いています。今度、ぜひ競馬場に行きたいと思います。そのときは馬券にもチャレンジしたいですね。

幅田 勝負師の一面がうかがえますね。大阪や京都へはよく来られるのですか。

大林 出身は東京ですが、大阪のチームに所属していたときは、関西に住んでいました。関西弁は喋れませんが、心は関西人なんです。また、京都は大好きな新撰組の活躍した場所ですので、よく訪れます。

岡 京都にお越しの際は、ぜひ京都競馬場へも遊びに来て下さいね。本日はありがとうございました。

司会 越山深生
(平成21年10月23日収録)

